

【 復活トロパリ 第4調 】

しゅのおんなで し は ふくかつのひかるおと
 主 女 弟 子 は 復 活 の 光 お 音
 づれ を てんしより ききうけえ て、
 天 使 聞 受
 げんそよりの ていざいをふる いすて、しと
 原 祖 定 罪 を 振 棄 使 徒
 にほこりてい え り、し はほろぼさ
 誇 日 死 滅
 れ、ハリストスか みは ふくか つして、せかいに
 神 復 活 世 界
 おおいなる あわれみをたまえり。
 大 憐 賜

【 聖世祖主日のトロパリ 第2調 】

しんのかんかりよくは おおいなるか あな、み
 信 感 化 力 大 哉 三
 たりのしょうしゃは ほのおのいづみのなかにあ
 少 者 焰 泉 中 在
 りて、あんそくのみづにおけるがごとくよ喜
 安 息 水 於 如 喜
 るこべえり、よげんしゃダニイルもししを
 預 言 者 獅

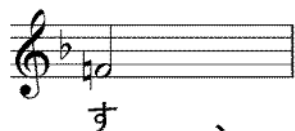
ひつじのごとくぼくするものとしてあらわれ
 羊 如 牧 者 顯
 たあり。ハリストスカみよ、かれらの
 神 彼 等
 きとうによってわれらのたましいをすくいた
 祈 禱 因 我 等 靈 救 給
 まあえ。

【 新年のトロパリ 第2調 】

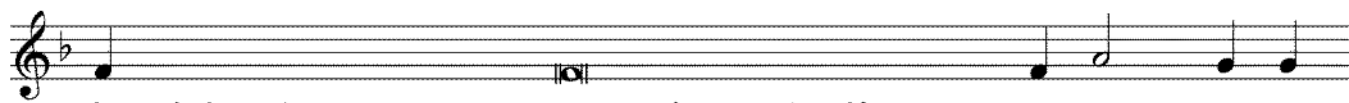
ときととしとを おのれのけんないにおきたま
 時 歳 己 権内 置 給
 いし ばんぶつのぞうせいしゅ うよ、なんぢの
 萬物 造 成 主 爾
 おんたくをもつて としにこうむらあせ、
 恩 澤 以 年 冠
 しょうしんぢよのきとうによりて、われらをへ平
 生 神女 祈 禱 因 我 等
 いあんにももりてすくいたまあえ。
 安 守 救 給

【 復活のコンダク 第4調 】

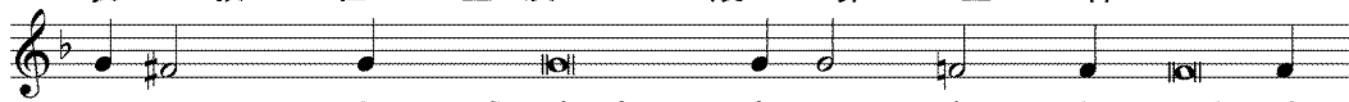
こうえいはちちとこ おとせいしんにき
 光 榮 父 子 聖 神 歸



す



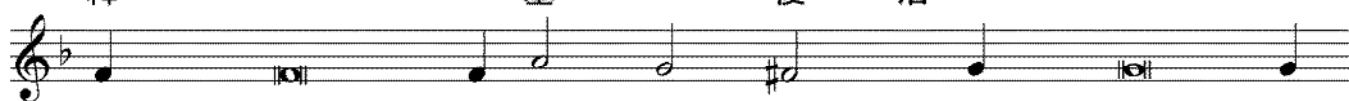
わがきゆうせいしゅおよびしょくざいしゅはかみと
我 救 世 主 及 贖 罪 主 神



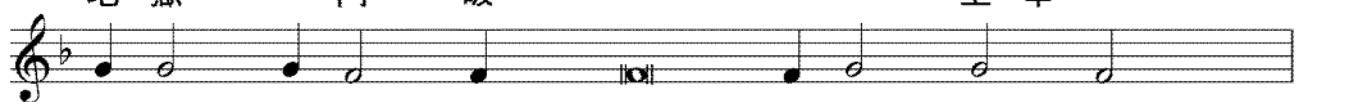
して、ちのうまれしものをかせより
地 生 者 を 桎 梏



ときて、はかよりふくかつせしめ、
釋 墓 復 活

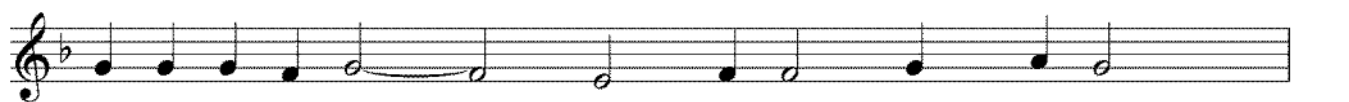


ぢごくのもんをやぶりて、しゅさいとして
地 獄 門 破 主 宰

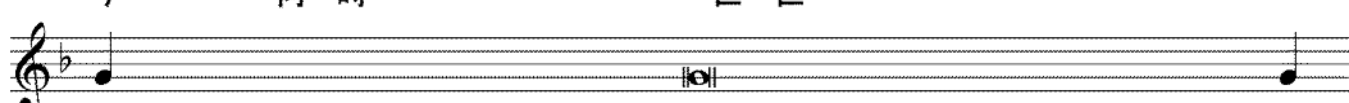


みっかめにふくかつしたまえり。
三 日 目 復 活 給 え り。

【 聖世祖主日のコンダク 第6調 】



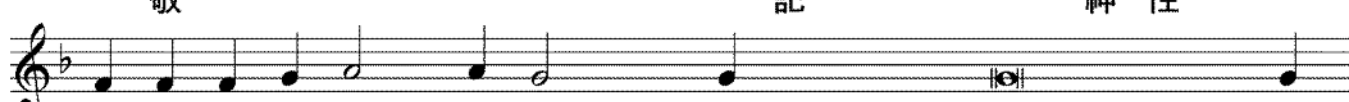
いまもいつうもよよに、アミン。
今 何 時 世 世 に、ア ミ ン。



みえにふくたるものはてのしるしたるかたち
三 重 福 者 手 記 像



をうやまわらずして、しるされぬしんせいに
敬 記 神 性



ようごせられて、ひのげきじょうにえいを
擁 護 火 劇 場 榮



えたあり。かれらはたえがたきほのお
獲 彼 等 堪 難 焰

の な か に た ち て 、 か み を よ べ え り 、
 中 立 神 呼

あ あ か ん ゆ う の し ゅ よ 、 い そ げ 、 じ れ ん な る に
 鳴 呼 寛 宥 主 よ 急 慈 憐

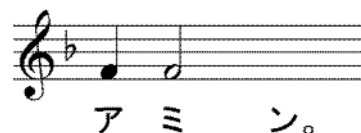
よ り て す み や か に わ れ ら を た す け た
 因 速 我 等 助 給

ま え 、 な ん ぢ は ほ っ す る と こ ろ よ く せ ざ る
 爾 欲 所 能

な あ し 。

司祭) (黙誦： ^{せい}聖なる神、^{かみ}聖者の中に^{せいじゃ}息い、^{うち}セラフィムより^{いこ}聖三の聲を以て歌頌せられ、
^{さんえい}ヘルヴィムより^{ことごと}讚榮せられ、^{てんぐん}悉くの天軍より^{ふくはい}伏拝せられ、^{ばんぶつ}萬物を^む無より^{ゆう}有と
^{ひと}なし、^{なんぢ}人を^{ぞう}爾の^{しょう}像と^よ肖とに依りて^{つく}造り、^{なんぢ}爾が^{もろもろ}諸の^{たまもの}賜を以て^{もつ}之を^{これ}飾り、
^{ねが}願う者に^{もの}智慧と^{ちえ}明悟とを^{めいご}與え、^{あた}罪を行^{つみ}う者を^{おこな}棄てずして、^{もの}其^す救の^{そのすくい}爲に^{ため}痛悔
^たを立て、^{われらいや}我等卑しくして^{ふとう}不當なる^{なんぢ}爾の^{しょぼく}諸僕を、^こ此の^{とき}時に於ても、^{おい}爾が^{なんぢ}聖な
^{さいだん}る祭壇の^{こうえい}光榮の^{まえ}前に立ちて、^た爾に^{なんぢ}當然の^{とうぜん}伏拝^{ふくはい}讚榮を^{さんえい}奉^{たてまつ}るに^た堪^{もの}うる者と
^{しゅさい}なしし主宰よ、^{なんぢみづか}爾親ら^{われら}我等^{ざいにん}罪人の^{くち}口よりも^{せいさん}聖三の^{うた}歌を受け、^{なんぢ}爾の^{じんじ}仁慈を
^{もつ}以て^{われら}我等に^{のぞ}臨み、^{われら}我等に^{およ}凡そ^{じゆう}自由と^{じゆう}自由ならざる^{つみ}罪を^{ゆる}赦し、^わ我が^{たましい}靈と^{からだ}體と
^{せい}を^{われら}聖にし、^{しょうがいぜんこう}我等に^{もつ}生涯^{なんぢ}善功を以て^{つと}爾に^え務むるを^{たま}得せしめ^{せい}給え、^{せい}聖なる
^{しょうしんぢよ}生神女と^{こせい}古世より^{なんぢ}爾の^{よろこび}喜を^な爲しし^{しよせいじん}諸聖人と^{きとう}の^よ祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋 ^{けだしわ}我が^{かみ}神よ、^{なんぢ}爾は^{せい}聖なり、^{われら}我等^{こうえい}光榮を^{なんぢ}爾^{ちち}父と^こ子と^{せいしん}聖神に^{けん}献ず、^{いま}今も^{いつ}何時も^{よよ}世世
 に、



【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い な る
聖 神 聖 勇 毅 聖

じょう せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め
常 生 者 我 等 憐

よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い
聖 神 聖 勇 毅 聖

な る じょう せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ
常 生 者 我 等 憐

め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、
聖 神 聖 勇 毅

せ い な る じょう せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い しん
光 榮 父 子 聖 神

に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。
歸 今 何 時 世 世

せ い な る じょう せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う
聖 神 聖 勇

き、せいなるじょうせいのもものよ、われらを
 殺 聖 常 生 者 我 等 を
 あわれめよ。

司祭) (黙誦：主しゅの名なに依よりて來きたる者ものは崇あがめ讃ほめらる、ヘルヴィムざに座ものする者なんぢよ、爾そのくには其國
 の光こう榮えいの寶ほう座ざに在ありて恒つねに崇あがめ讃ほめらる、今いまも何いつ時よも世よ世よに、)

【 提綱 プロキメン 聖世祖の主日 第4調 及び新年の 第3調 】

司祭) 慎つつしみて聽きくべし、衆しゅうじん人に平安へいあん、

誦經) 爾なんぢの神しんにも、

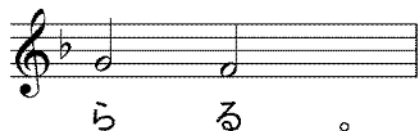
司祭) 睿えいち智、

誦經) プロキメン、主しゅ我わが先せん祖ぞの神かみよ、爾なんぢは讃さん揚ようせられ、爾なんぢの名なは世よ世よに讃さん美び讃さん榮えいせらる、

しゅ わ が せんぞの か み よ 、 なんぢは さ んよう せ
 主 我 先 祖 神 爾 讃 揚
 ら れ 、 なんぢの な は よ よ に さんびさんえい せ え
 爾 名 世 世 讃 美 讃 榮
 ら る 。

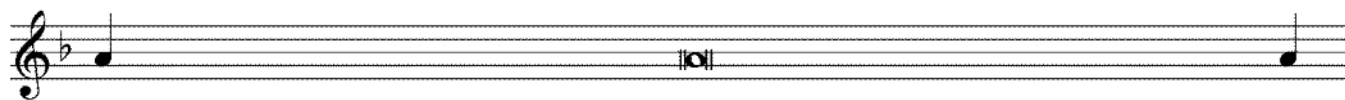
誦經) 蓋けだ爾なんぢは凡おそ我われ等らに行おこいし事ことに於おいて義ぎなり、

しゅ わ が せんぞの か み よ 、 なんぢは さ んよう せ
 主 我 先 祖 神 爾 讃 揚
 ら れ 、 なんぢの な は よ よ に さんびさんえい せ え
 爾 名 世 世 讃 美 讃 榮



ら る 。

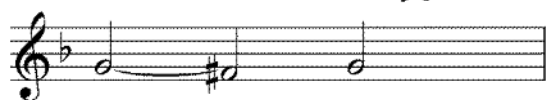
誦經) 吾が主は 大なり、其力も亦 大なり、其智慧は測り難し、



わがしゅはおおになり、そのちからもまたおお
吾主大 其力亦大



いなり、そのちえははかりが難
其 智慧 測 難



たあし。

【 アポストロス 使徒經 328 端 エウレイ書 11 章 9~10、17~23、32~40 節 】

司祭) 睿智、

誦經) 聖使徒パヴェルがエウレイ人に達する書の讀、

司祭) 謹みて聴くべし、

誦經) 兄弟よ、信によりてアヴラアムは許約の地に在りて、己に屬せざる地に於けるが如く、

イサク及びイアコフ、即同一の許約を同じく嗣ぐ者と偕に幕に居りたり、蓋彼は

基ある城、神の營み造る者を俟てり。信に由りてアヴラアムは試みられて、イサク

を獻げたり、許約を受けし者にして、其獨生子を獻げたり、即爾の裔はイサクに

由りて稱えられんと、言われし所の者なり。蓋彼意えり、神は亦死より復活せしむる

を能すと。故に之を預象として受けたり。信に由りてイサクは將來の事を指して、イ

アコフ及びイサフを祝福せり。信に由りてイアコフは死なんとする時、イオシフの二子を

祝福し、且其杖の上に拜せり。信に由りてイオシフは終らんとする時、イズライリの諸

子の出でん事を憶わしめ、且己の骸骨の事を遺命せり。信に由りてモイセイは生れし後、

三月間其父母に匿されたり、蓋彼等は子の美しきを見て、王の命を畏れざりき。我

またなに ^い も ^{およ}
 復 何 をか言わん、若しゲデオン、ヴァラク、サムプソン、イエツファイ、ダヴィド、サムイル、及
 び他の預 言 者 の 事 を述べんには、我に時足らざらん。彼等は信に由りて諸 國 を 従 え、義
 を 行 い、許 約 を受け、獅の口を箝ぎ、火の 勢 を滅し、 劔 の刃を避け、弱きよりして
 強くせられ、 戦 に勇み、異邦の軍を 潰 せり、 婦 は其死者を復 活 せし者として受け
 たり、亦 或 者は更に善き復 活 を得ん爲に、 免 るるを欲せずして、酷く戮されたり、他の
 者は嘲 弄 と鞭 扑 と、又 縲 綯 と 圜 圖 との 試 を受け、石にて撃たれ、 鋸 にて解かれ、拷
 問に遇わせられ、 刃 にて殺され、綿 羊 と山 羊 との皮を衣て流離し、 窮 乏、患 難、辛
 苦を忍び、世界に置くに堪えざる者は、曠野、山 嶺、巖 穴、地 窟 に 徨 えり、此等皆 信
 に由りて 證 せられたれども、許 約 せられし 所 を獲ざりき、蓋 神は我等の事に於て更に
 善き事を見んせり、彼等は我等と偕にせずしては 全 きを得ざらん爲なり。

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ、信仰によって、他国にいるようにして約束の地に宿り、同じ約束を継
 ぐイサク、ヤコブと共に、幕屋に住んだ。彼は、ゆるがぬ土台の上に建てられた都を、待ち望んでいた
 のである。その都をもくろみ、また建てたのは、神である。信仰によって、アブラハムは、試練を受け
 たとき、イサクをささげた。すなわち、約束を受けていた彼が、そのひとり子をささげたのである。こ
 の子については、「イサクから出る者が、あなたの子孫と呼ばれるであろう」と言われていたのであった。
 彼は、神が死人の中から人をよみがえらせる力がある、と信じていたのである。だから彼は、いわば、
 イサクを生きかえて渡されたわけである。信仰によって、イサクは、きたるべきことについて、ヤコ
 ブとエサウとを祝福した。信仰によって、ヤコブは死のまぎわに、ヨセフの子らをひとりひとり祝福し、
 そしてそのつえのかしらによりかかって礼拝した。信仰によって、ヨセフはその臨終に、イスラエルの
 子らの出て行くことを思い、自分の骨のことについてさしずした。信仰によって、モーセの生れたとき、
 両親は、三か月のあいだ彼を隠した。それは、彼らが子供のうるわしいのを見たからである。彼らはま
 た、王の命令をも恐れなかった。このほか、何を言おうか。もしギデオン、バラク、サムソン、エフタ、
 ダビデ、サムエル及び預言者たちについて語り出すなら、時間が足りないであろう。彼らは信仰によっ
 て、国々を征服し、義を行い、約束のものを受け、ししの口をふさぎ、火の勢いを消し、つるぎの刃を
 のがれ、弱いものは強くされ、戦いの勇者となり、他国の軍を退かせた。女たちは、その死者たちをよ
 みがえらせてもらった。ほかの者は、更にまさったいのちによみがえるために、拷問の苦しみに甘ん
 じ、放免されることを願わなかった。なおほかの者たちは、あざけられ、むち打たれ、しぼり上げられ、
 投獄されるほどのめに会った。あるいは、石で打たれ、さいなまれ、のこぎりで引かれ、つるぎで切り
 殺され、羊の皮や、やぎの皮を着て歩きまわり、無一物になり、悩まされ、苦しめられ、この世は彼ら
 の住む所ではなかった)、荒野と山の中と岩の穴と土の穴とを、さまよい続けた。さて、これらの人々は
 みな、信仰によってあかしされたが、約束のものは受けなかった。神はわたしたちのために、さらに良
 いものをあらかじめ備えて下さっているので、わたしたちをほかにしては彼らが全うされることはない。

【 使徒經 (ティモフェイ前書2章1~6節) 】

誦經) 子^こティモフェイよ、我^{われ} 凡^{およそ}の事^{こと}に先^{さき}だちて勸^{すす}む、衆^{しゅうじん} 人^たの爲^{ため}、帝^{てい} 王^{おう}、及^{およ}び凡^{およ}そ權^{けん}を操

る者^{もの}の爲^{ため}に、祈^{きとう}禱^{きがん}、祈^{こんきゅう}願^{かんしゃ}、懇^な 求^{われら}、感^{およそ} 謝^{けいけん}を爲^{せいけつ}さん^{こと}を、我^{われ}等^らが 凡^{およそ}の敬^{けい} 虔^{けん}と聖^{せい} 潔^{けつ}とを

以^{もつ}て平^{へい} 安^{あん}にし、穩^{おん} 靜^{せい}なる 生^{いのち} を度^{わた}らん爲^{ため}なり、蓋^{けだし} 此^これ我^{われ}等^らの救^{きゅう} 主^{しゅ}神^{かみ}の前^{まえ}に善^{ぜん}にし

て納^いれらるる事^{こと}なり、彼^{かれ}は 衆^{しゅうじん} 人^{じん}が 救^{すくい} を得^え、及^{およ}び眞^{しん} 實^{じつ}を知る^しに至^{いた}らん^{こと}を欲^{ほつ}す。蓋^{けだし}

神^{かみ}は一^{いつ}なり、神^{かみ}と人^{ひと}との 間^{あいだ}には 中^{ちゅう} 保^ほ者^{しや}も亦^{また}一^{いつ}なり、乃^{すなわち} 人^{ひと}ハリス^{わち}トス イイス、

衆^{しゅうじん} 人^{じん}の爲^{ため}に 己^{おのれ} を與^{あた}えし者^{もの}なり。彼^{かれ}に尊^{そん} 敬^{けい}と光^{こう} 榮^{えい}とは世^よ世^よに歸^きす、アミン。

(比較用 口語訳) わたしの子テモテよ、まず第一に勧める。すべての人のために、王たちと上に立っているすべての人々のために、願いと、祈と、とりなしと、感謝とをささげなさい。それはわたしたちが、安らかで静かな一生を、真に信心深くまた謹厳に過ごすためである。これは、わたしたちの救主である神のみまえに良いことであり、また、みこころにかなうことである。神は、すべての人が救われて、真理を悟るに至ることを望んでおられる。神は唯一であり、神と人との間の仲保者もただひとりであって、それは人なるキリスト・イエスである。彼は、すべての人のあがないとしてご自身をささげられたが、それは、定められた時になされたあかしにほかならない。

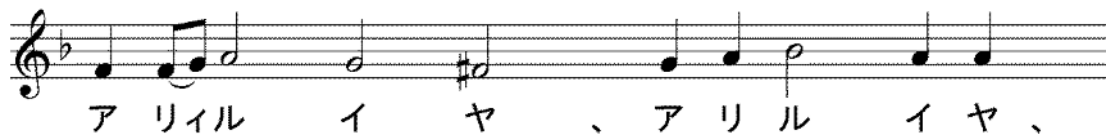
【 アリルイヤ 聖世祖の主日 及び新年の 第4調 】

司祭) 爾^{なんぢ} に平^{へい} 安^{あん}、

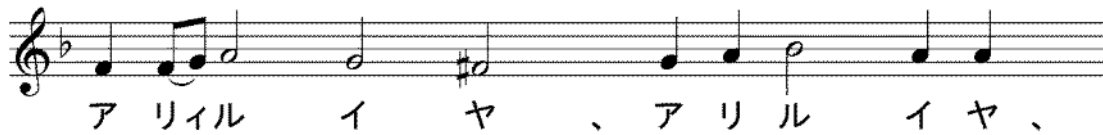
誦經) 爾^{なんぢ} の神^{しん}にも、

司祭) 睿^{えい} 智^ち、

誦經) アリルイヤ、



誦經) 神^{かみ}よ、我^{われ}等^らは 己^{おのれ} の耳^{みみ}にて聞^きけり、我^{われ}が列^{れつ} 祖^そは 爾^{なんぢ} が 行^{おこな} いし事^{こと}を我^{われ}等^らに述^のべたり、

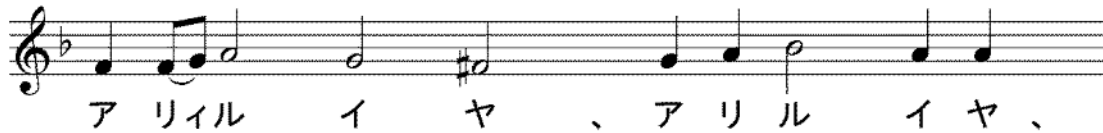


ア リル イ ヤ 、 ア リル イ ヤ 、

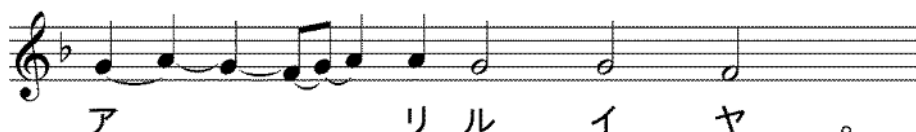


ア リル イ ヤ 。

誦經) ^{かみ ほめうた おい なんぢ ぞく} 神よ、讃頌はシオンに於て爾に屬す、



ア リル イ ヤ 、 ア リル イ ヤ 、



ア リル イ ヤ 。

司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅきい わ こころ かみ し ちえ いきぎよ ひかり かがや わ しねん} 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の 浄き光を輝かし、我が思念

^{め ひら なんと ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ} の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる 誠を

^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ ところ} 畏るる 畏をも入れて、我等が 悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

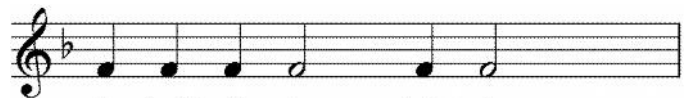
^{おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ} を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、

^{なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん} 爾は我が 靈と體との光 照なり、我等 爾と 爾の無原の父と至聖至善にし

^{いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ} て生命を 施す 爾の神とに光 榮を獻ず、今も何時も世に、アミン。)

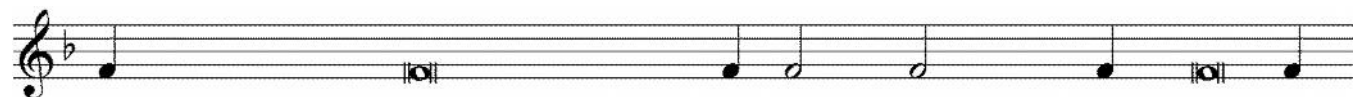
【 ^{エヴァンゲリオン} 福音經 マトフェイ福音書1端 1章1~25節 】

司祭) ^{えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん} 睿智、 肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



なんぢの し んにも 。
爾 神

司祭) ^{でん せいふくいんけい よみ} マトフェイ傳の聖福音經の讀、



しゅよ、 こう えい は なんぢに き し 、 こう えい
主 光 榮 爾 歸 し 光 榮



司祭) 謹^{つつし}みて聽^きくべし、ダヴィドの子^こ、アヴラアムの子^こ、イイススハリストスの族譜^{ぞくふ}。アヴラアムはイサアクを生^うみ、イサアクはイアコフを生^うみ、イアコフはイウダ及び其^{およ}兄弟^{そのけいてい}を生^うみ、イウダはファマリに因^よりてファレス^{およ}及びザラ^うを生^うみ、ファレスはエスロム^うを生^うみ、エスロムはアラム^うを生^うみ、アラムはアミナダフ^うを生^うみ、アミナダフはナアツソン^うを生^うみ、ナアツソンはサルモン^うを生^うみ、サルモンはラハヴ^よに因^よりてヴォオズ^うを生^うみ、ヴォオズはルフィ^よに因^よりてオヴィド^うを生^うみ、オヴィドはイエッセイ^うを生^うみ、イエッセイはダヴィド王^{おう}を生^うみ、ダヴィド王^{おう}はウリヤの妻^{つま}に因^よりてソロモン^うを生^うみ、ソロモンはロヴァアム^うを生^うみ、ロヴァアムはアヴィヤ^うを生^うみ、アヴィヤはアサ^うを生^うみ、アサはイオサファト^うを生^うみ、イオサファトはイオラム^うを生^うみ、イオラムはオ ज्या^うを生^うみ、オ ज्याはイオアフアム^うを生^うみ、イオアフアムはアハズ^うを生^うみ、アハズはエゼキヤ^うを生^うみ、エゼキヤはマナッシヤ^うを生^うみ、マナッシヤはアモン^うを生^うみ、アモンはイオシヤ^うを生^うみ、イオシヤはイオアキム^うを生^うみ、イオアキムは、ヴァヴィロン^うに徙^{うつ}さる^{まえ}る前^{およ}、イエホニヤ及び其^{およ}兄弟^{そのけいてい}を生^うみ、ヴァヴィロン^うに徙^{うつ}されし^{のち}後^う、イエホニヤはサラフィイリ^うを生^うみ、サラフィイリはゾロヴァヴェリ^うを生^うみ、ゾロヴァヴェリはアヴィウド^うを生^うみ、アヴィウドはエリアキム^うを生^うみ、エリアキムはアゾル^うを生^うみ、アゾルはサドク^うを生^うみ、サドクはアヒム^うを生^うみ、アヒムはエリウド^うを生^うみ、エリウドはエレアザル^うを生^うみ、エレアザルはマトファン^うを生^うみ、マトファンはイアコフ^うを生^うみ、イアコフはイオシフ^うを生^うめり、^{すなわち}即^{おっと}マリヤの夫^{とな}なり、マリヤよりハリストスと稱^うるイイススは生^うれたり。是^かくの如^{ごと}く世^よを歴^ふること、アヴラアムよりダヴィド^{いた}に至^{じゅうよだい}るまで十四代^う、ダヴィドよりヴァヴィロン^うに徙^{うつ}さる^うに至^{いた}るまで亦^{またじゅうよだい}十四代^う、ヴァヴィロン^うに徙^{うつ}されし^{いた}よりハリストス^{またじゅうよだい}に至^うるまで又^う十四代^うなり。イイススハリストスの生^うまるること左^うの如^さし、其^{そのは}母^{へい}マリヤ、イオシフに聘^いせられて、未^{いま}だ婚^{こん}せざる^{さき}先に、聖^{せい}神^{しん}に由^よりて孕^{はら}めること見^{あらわ}れたり。その夫^{おっと}イオシフは義^ぎ人^{じん}にして、之^{これ}を顯^{あらわ}にせん^{ほつ}ことを欲^{ひそか}せず、私^{かれ}に彼^{はな}を離^{のぞ}さん^{しか}ことを望^こめり。然^これども此^{こと}の事^{おも}を思^{とき}える時、

み しゅ つかいゆめ かれ あらわ い こ なんぢ つま い
 視よ、主の使 夢に彼に現れて曰えり、ダヴィドの子イオシフよ、爾の妻マリヤを納るる
 ことを懼るる勿れ、蓋 其内に孕まれし者は聖神に由るなり、彼は子を生まん、爾其
 な な かれそのたみ そのつみ すく およ こ こと な
 名をイイスと名づけん、彼其民を其罪より救わんとすればなり。凡そ此の事の成りしは、
 しゅ よげんしゃ も い ところ かな いた いわ み どうぢよはら こ う そのな
 主が預言者を以て言いし所に應うを致す、曰く、視よ、童女孕みて子を生まん、其名は
 エムヌイルと稱えられん、譯すれば神我等と偕にするなり。イオシフ 寐より起きて、主の
 つかい かれ めい ごと おこな そのつま い ただいま しつ おな そのちようし
 使の彼に命ぜし如く行い、其妻を納れたり。惟未だ室を同じくせざるに、其冢子
 う およ すなわちそのな な
 を生むに迨べり、則其名をイイスと名づけたり。

(比較用 口語訳) アブラハムの子であるダビデの子、イエス・キリストの系図。アブラハムはイサクの父であり、イサクはヤコブの父、ヤコブはユダとその兄弟たちとの父、ユダはタマルによるパレスとザラとの父、パレスはエスロンの父、エスロンはアラムの父、アラムはアミナダブの父、アミナダブはナアソンの父、ナアソンはサルモンの父、サルモンはラハブによるボアズの父、ボアズはルツによるオベデの父、オベデはエッサイの父、エッサイはダビデ王の父であった。ダビデはウリヤの妻によるソロモンの父であり、ソロモンはレハベアムの父、レハベアムはアビヤの父、アビヤはアサの父、アサはヨサパテの父、ヨサパテはヨラムの父、ヨラムはウジヤの父、ウジヤはヨタムの父、ヨタムはアハズの父、アハズはヒゼキヤの父、ヒゼキヤはマナセの父、マナセはアモンの父、アモンはヨシヤの父、ヨシヤはバビロンへ移されたころ、エコニヤとその兄弟たちとの父となった。バビロンへ移されたのち、エコニヤはサラテルの父となった。サラテルはゾロバベルの父、ゾロバベルはアビウデの父、アビウデはエリヤキムの父、エリヤキムはアゾルの父、アゾルはサドクの父、サドクはアキムの父、アキムはエリウデの父、エリウデはエレアザルの父、エレアザルはマタンの父、マタンはヤコブの父、ヤコブはマリヤの夫ヨセフの父であった。このマリヤからキリストといわれるイエスがお生れになった。だから、アブラハムからダビデまでの代は合わせて十四代、ダビデからバビロンへ移されるまでは十四代、そして、バビロンへ移されてからキリストまでは十四代である。イエス・キリストの誕生の次第はこうであった。母マリヤはヨセフと婚約していたが、まだ一緒にならない前に、聖霊によって身重になった。夫ヨセフは正しい人であったので、彼女のことが公けになることを好まず、ひそかに離縁しようと決心した。彼がこのことを思いめぐらしていたとき、主の使が夢に現れて言った、「ダビデの子ヨセフよ、心配しないでマリヤを妻として迎えるがよい。その胎内に宿っているものは聖霊によるのである。彼女は男の子を産むであろう。その名をイエスと名づけなさい。彼は、おのれの民をそのもろもろの罪から救う者となるからである」。すべてこれらのことが起ったのは、主が預言者によって言われたことの成就するためである。すなわち、「見よ、おとめがみごもって男の子を産むであろう。その名はインマヌエルと呼ばれるであろう」。これは、「神われらと共にいます」という意味である。ヨセフは眠りからさめた後に、主の使が命じたとおりに、マリヤを妻に迎えた。しかし、子が生れるまでは、彼女を知ることはなかった。そして、その子をイエスと名づけた。

エヴァンゲリオン
 【 福音經 ルカ福音書13端 4章16～22節 】

か と き そのよういく ところ きた スポタ ひ そのじょうれい よ
 司祭)彼の時イイス其養育せられし所のナザレトに來り、安息の日に、其常例に依りて、

かいどう い よ ほつ た よげんしゃ しょ かれ あた かれ しょ ひら
 會堂に入り、讀まんと欲して立てり。預言者イサイヤの書を彼に與うるあり。彼は書を披
 きて、さしる ところ いた い しゅ しんわれ あ けだしかれ われ あぶら まづ
 き者に福音せしめ、我を遣して、心の傷める者を醫し、擄者に釈を、瞽者に見るこ
 もの ふくいん われ つかわ ころろ いた もの いや とりこ ゆるし めしい み
 とを傳え、壓せらるる者に自由を與え、主の禧年を傳えしめたりと。乃書を掩
 つた あつ もの じゆう あた しゅ よろこばしきとし つた すなはちしよ おお
 い、役者に與えて座せしに、會堂に在る者皆彼に目を注げり。彼宣べ始めて曰えり、此の
 えきしゃ あた ざ かいどう あ ものみなかれ め そそ かれの はじ い こ
 なんぢら き ところ しょ いまかな しゅうみなこれ しょう かつそのくち い おんちよう
 爾等が聴きし所の書は今應えり。衆皆之を證し、且其口より出づる恩寵の
 ことば き
 言を奇とせり。

(比較用 口語訳) それからイエスはお育ちになったナザレに行き、安息日にいつものように會堂には
 入り、聖書を朗読しようとして立たれた。すると預言者イザヤの書が手渡されたので、その書を開いて、
 こう書いてある所を出された、「主の御霊がわたしに宿っている。貧しい人々に福音を宣べ伝えさせるた
 めに、わたしを聖別して下さったからである。主はわたしをつかわして、囚人が解放され、盲人の目
 が開かれることを告げ知らせ、打ちひしがれている者に自由を得させ、主のめぐみの年を告げ知らせ
 ののである」。イエスは聖書を巻いて係りの者に返し、席に着かれると、會堂にいるみんなの者の目がイエ
 スに注がれた。そこでイエスは、「この聖句は、あなたがたが耳にしたこの日に成就した」と説きはじめ
 られた。すると、彼らはみなイエスをほめ、またその口から出て来るめぐみの言葉に感嘆した。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえいは
 主 光 榮 爾 歸 光 榮
 はなんぢにきす。
 爾 歸

※聖体礼儀③ (金口イオアン聖体礼儀) へ